

Glocal Tenri



5

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.24 No.5 May 2023

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
諸井慶徳の2つの机
／井上 昭洋 1
- ・ 天理教の異文化伝道と「文化」の「翻訳」
(5)
本連載における「翻訳」について④
／加藤 匡人 2
- ・ 台湾の社会と文化—天理教伝道史と災害民族誌 (13)
戦前台湾における天理教伝道の全体像
／山西 弘朗 3
- ・ 社会福祉からみる現代社会—天理教の社会福祉活動に向けて— (8)
天理教の社会福祉活動の歴史的展開
／深谷 弘和 4
- ・ イスラームから見た世界 (24)
「信条教育」について考える—イスラームの宗教教育—②
／澤井 真 5
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観と教えの伝播— (27)
6. コロンビアの日常5：交通網の今昔
／清水 直太郎 6
- ・ 天理参考館から (31)
「ニコボツ」の精神
／幡鎌 真理 7
- ・ 新刊紹介 8

巻頭言

諸井慶徳の2つの机

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

ここまで、天理教学を専門としない、宗教学者でさえもない私が、天理教学について臆面もなく私見を述べてきた。「天理教学」を所与のものとして、その何たるかについて共通の理解があることを前提に議論を進めてきたわけである。過度に厳密な定義付けは議論を枯れさせることもあるので、その塩梅が難しいが、ここで現在流通している「天理教学」の定義を確認しておいても良いかもしれない。

『天理教事典 第三版』によれば、天理教学とは「天理教の“Theology”」である。①原典学（原典研究）、②歴史的教学（教祖伝、教会史、伝道史など）、③理論的教学・組織教学（教義学など）、④実践的教学（教会学、伝道学など）の4つの研究領域から構成される、とある。また、「天理教学研究」という項目もあり、同様に4つの領域として、①原典学、②歴史的教学、③理論的教学、④実践的教学をあげ、より詳細な解説を施している。どうやら「天理教学」と「天理教学研究」は同じ学問領域を指し示しているようであり、なぜ別項目として記載されたのか編集当時は全くの部外者であった私には分からない。

ところで、島田（2009）が指摘するように、この体系的分類の典拠は諸井慶徳の「天理教神学序章」（1950）である⁽¹⁾。彼によれば、諸井の提唱した「天理教神学」を基盤に昭和20年代に誕生したのが「天理教学」であった。「伝統の発明」論に倣えば、天理教学はこの時期に“発明”されたわけである。また、島田の指摘を待つまでもなく、この発明された天理教学の体系はキリスト教神学を踏襲していることは明らかだ。

天理教学の体系化に大きな役割を果たした諸井だが、そのエピソードについて紹介したい。中島秀夫の回想談である⁽²⁾。

お聞きしたところによりますと、諸井先生は書齋に机を二つ置かれていたようです。一つは天理教学用の机、もう一つは宗教学一般の研究用の机というように、二つあったとのことでした。机を変えることによって、それらの研究のために頭の切り替えをされたのだと思うのですが、超人的な研究の姿勢に畏敬の念すら持っていました。

中島は、諸井が2つの研究のために「頭の切り替え」をしたと理解している。おそらく、それは正しい解釈であろう。また、天理教学研究を支えた諸井の信仰的パッションは宗教学一般の研究の基盤にもなっていたはずだ。信仰をバックボーンに天理教学と宗教学は繋がっていたが、天理教学用の机と宗教学用の机は分けていたわけである。宗教研究において信者と不信者の立ち位置は異なる。どれほどその宗教にシンパシーを感じていようが不信者（アウトサイダー）の投げかける視線は信者（インサイダー）のそれとは同じではないだろう。そういうものとして宗教学研究を営む時、別の机が必要だったとも言える。

天理教学と宗教学の関係について再考する時、このエピソードは極めて示唆的だ。はたして、諸井は「宗教学一般の研究用の机」の上で他の宗教の隣に天理教を並べ、他の宗教に投げかける視線を天理教にも同様に投げかけることの可能性について考えることはあったのだろうか。

〔註〕

島田勝巳（2009）「『天理教学』の生成と展開—媒介としての宗教諸学の意義をめぐって—」『天理教学研究』43, 117～151頁。

宗教学科研究室（2009）「天理教教義学の探求—中島秀夫先生に聞く—」『天理教学研究』43, 3～15頁。